

# 第14回 日本腰痛学会

The 14th Annual Meeting of the Japanese Society of Lumbar Spine Disorders

プログラム・抄録集

会 期： 2006年 11月 18日 (土)

会 場： 福井商工会議所

世話人： 馬場 久敏 福井大学医学部器官制御医学講座整形外科学領域

# 第14回日本腰痛学会学術集会の開催にあたりまして

---

世話人 馬場 久敏

(福井大学医学部器官制御医学講座整形外科領域)

この度、第14回日本腰痛学会を平成18年11月18日(土)、福井商工会議所におきまして開催させて頂くはこびとなりました。現在、教室員および教室事務が中心となり皆様をお迎えすべく準備を行っております。

腰痛はもちろん日本人愁訴の第1位(男女とも、平成17年度版厚生省の指標)であります。日常の診療において、腰痛、関節痛、肩こりが最も頻度がたかく、機能的にも時に重大な問題を抱えている場合もございます。解剖学的機能障害 impairment がどの様に個人の生活レベルでの能力障害 disability をもたらし、その結果どの様な handicap を蒙って社会的 QOL の低下を招くのか、という問題は、当然のことながら現在のわが国の国情を勘案すれば最重要課題になることは自明の理、と言えましょう。腰痛診療にあたる際にはもちろん最先端の手術的治療をも時に施行しながら、実際にはいわゆる保存的治療或は運動リハビリテーション的アプローチを主体とした理念でもって臨むことが最も重要でありましょう。逆に、“長期漫然理学療法”に固執してしまいますと結局は患者の期待や信頼を失い、民間療法的なものに流れたり、或は単に技術だけを offer する技術家集団に流れたりする場合も多くなる懸念も生じてまいります。重要なことは、疾患の病因・病態に則して、しかも患者の社会的背景、生き方、ADL といったものに十分配慮しつつ、運動リハビリテーションから最先端手術治療までを行い得る知識と技量が必要となっているということでありましょう。今学会では、その様な様々な視点・観点から腰痛に対する様々な問題、課題、結果、展望について、情報を交換しあい、かつ会員・参加者すべてのひとに腰痛に取り組むヒントを得ていただければ、と希望している次第であります。

特別講演には金沢大学医学部附属病院長・富田勝郎教授(金沢大学大学院医学系研究科教授)をお招きし、先生の world-leading な脊椎骨破壊性病態へのご研究をお話して頂きます。また Oxford University Physiology Institute から Jill Urban, PhD をお招きし、椎間板の生物学、また山下敏彦教授(札幌医科大学)から生態生理・薬理動態についてお話を頂くことになっております。皆様にとりまして、本学術集会がよき“腰痛三昧”の一日として意義あるものとなって頂ける様、心から祈念致します。

(平成18年9月記す)